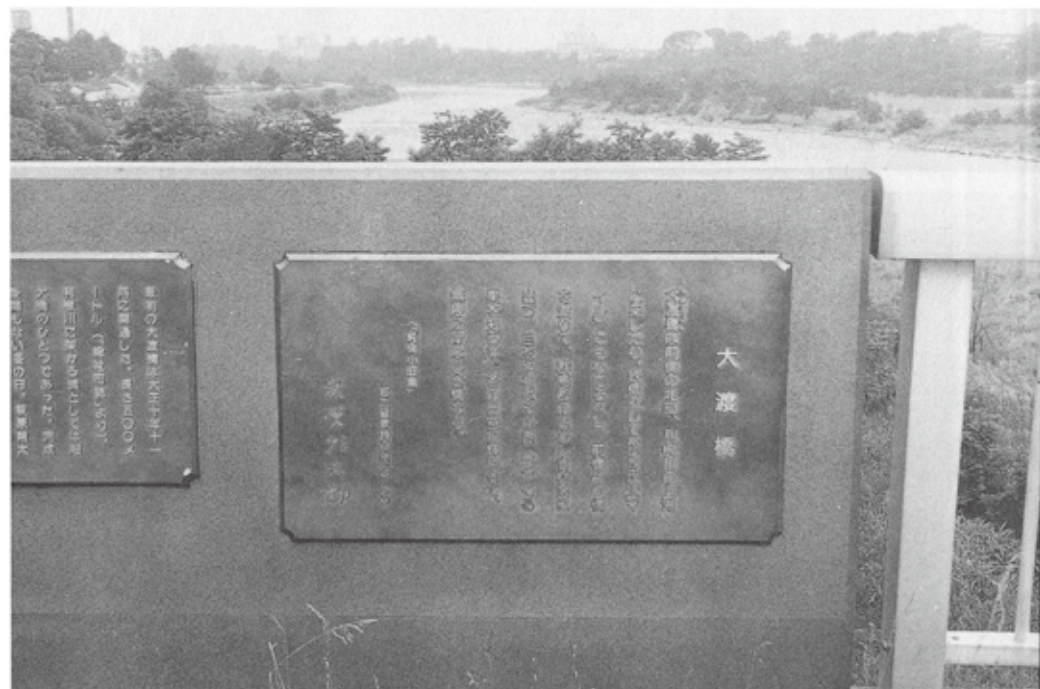


前橋文学館報

萩原朔太郎記念

水と緑と詩のまち

No.4 1996.8



献呈署名の古い自著

伊藤信吉

昨年五月に煥乎堂ギャラリーで、次いで年末から今年正月にかけて前橋文学館で、それぞれ「伊藤信吉文学展」開催にめぐまれた。私は文学展をへお祭りだと思っている。多少にかかわらずわいわい雰囲気を楽しかった。

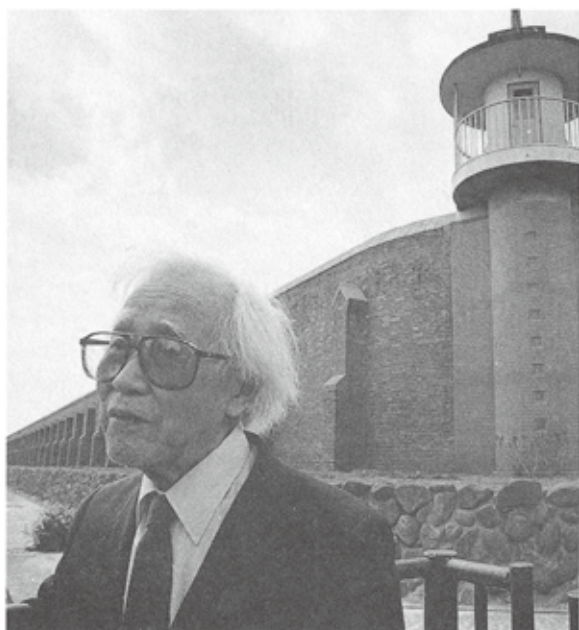
お祭りのあとは？ 二階も階下も書棚ガタガタ。二度つづきだ。ガタガタ当たり前と思ったり、溜息をついたり。だが、思いがけぬへ収穫もあつた。最初の自著二種が、思いがけぬ形で現れたりして。

私の最初の著作は詩集「故郷」（一九三三・昭和八年四月刊）で、二十七歳。次が評論「島崎藤村の文学」（一九三六・昭和十一年二月刊）で三十歳。二冊とも群馬郡元総社村大字元総社の生家に居たときの出版だった。

カバーが失くなつてしまい、汚れがひどくなる。眩きながら「島崎藤村の文学」を取り出し、頁をひらいて、え、と思った。見返しのところペン字で、

萩原朔太郎様 伊藤信吉

と献辞があるからだ。子供っぽい字体。これを書い



たのはチビた万年筆だった。伊藤の「藤」の略し方が今とまったく同じ。字体はまあどうでもよいとして、いったい、何だつて萩原さんへの献呈本が私の手もとにあるのか。しかも、そのことに、何だつて私自身が気づかずにはいたのか。奇妙だ。

この本を何人かの人におくって、いちばん先にとどいた礼状が、二月二十四日付けの萩原さんの封書であり、たぶん同じ頃なのが島崎藤村氏の封書だった。この献呈本を手にして萩原さんは、過褒といふべき内容の手紙を下さり、つづけて「現代詩」昭和十一年五月号掲載の「島崎藤村の文学」を読む」を執筆して下さった。それなのにその献呈本が私の手もとにある。

何かの折に萩原葉子さんからいただいた？ 自分のところには置くよりも、古い本だから著者の手へ戻した方がよい——といったことで、萩原葉子さんからいただいた、のかも知れない。そんなことを思ってみる。仮にそうだとすれば、そういう大事なことを忘れるなんて、軽症老人ボケということになる。

発行年月を振り返って、ちよつと数えたところ、今年「島崎藤村の文学」刊行からまる六十年だ。六十年前は萩原さん五十歳、信吉三十歳。そして今

年は萩原朔太郎生誕百十年であり、二十歳下の私が九十歳だ。

「君が在京ならば早速出かけて祝盃をあげたいのだが、遠方のことですから、手紙で心だけの祝詞を述べます。僕はこの出版を心から嬉しく思ひます。」こう書いて下さった五十歳の萩原さんを追慕する。手紙そのものから温味がよみがえってくる。

*

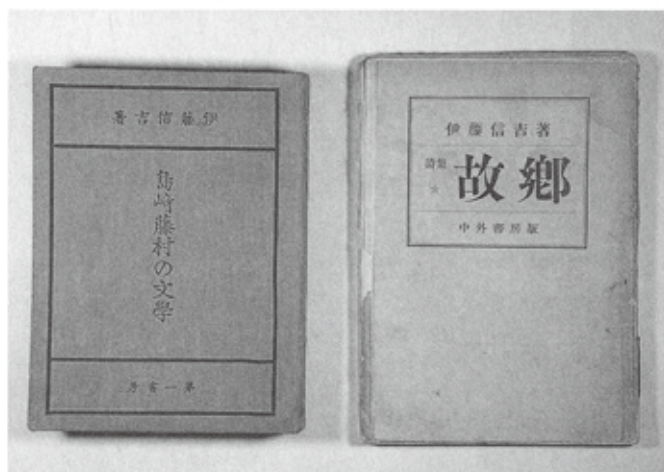
「自分が持つてるより、本人の方へ戻した方がいい、と思つてこれをあげる」ということで、福田紹太郎さんから、たぶん手渡しでもらった「故郷」が手もとにある。私が二十歳くらい、福田さんが二つくらい歳上の頃からの親交なのだから、贈り文句も、実際は前記よりもつとくだけた言い方だったろう。「信ちゃんの方へ置いた方がいい」といった語句、語調。さすがに「戻した方がよかんべ」とは言わなかったろうが、紹ちゃん、信ちゃんだったのだから、

萩原朔太郎様

伊藤信吉

だんべに通じる口調だった筈。
文学的わいらい仲間での呼び名・紹ちゃ

ん。芸術家名・福田紹太郎。貂ちやんは本名・長太郎を好いていなかった。嫌だ、という意味のことを私に言ったことがある。いつだったか、絵の方の話と覚えているが、誰かが匿名文章で「福田紹」と書いたことがある。「おれ（僕でなかった）のことを当てこすつたみたい、中国名みたいにしたんだ、おれを知ってる奴だね」という話をしたことがある。それでも長太郎よりもマシだ、という気持ちだったこと。彼は中国通だった。政治や商売でない、芸文に詳しく一家言を有していた。彼からもらった「故郷」は表紙が赤インキでよこ



伊藤信吉著
小説
故郷
中外書房

鳥崎藤村の文学

伊藤信吉

中叢一第

れている。インキをこぼして、あわてて拭いたのだろう。見返しに「福田紹太郎様 一九三三・四・二六 伊藤信吉」の献辞だ。萩原さんへの献辞と瓜二つの字体で「藤」の字の崩しもそっくり。いや、福田さんへの献呈の方がまる三年先なのだから、萩原さんへの献呈文字が瓜二つという順序だ。

実を言うと私は、ひよつとして、萩原さんへの献呈文字を、古書店から買った無署名本に、後で書きこんだ、と思われたりしては困ると、そんな被害妄想めいたことを想像したのだが、この福田献呈本で、そんな懸念は無くなった。二冊を並べてみれば、萩原献呈本が二七物でないことが瞭然だ。

中国趣味——そんな言い方を彼が承服するかどうか分からぬけれど、中国の各種の書に親しんだ貂ちやんは、自分の書画を独得な風趣にみがき上げ、画家であることの自負と共に、書にも自負をいだいていた。

「信ちゃんの字は、いつになっても昔のまんまだ、たまげつちまう」と言ったことがある。翻訳すれば私の字が、何歳になっても、依然として子供のままに下手だ、ということ。その通り。じゃ、貂ちゃんの文字、書体を私がみんな好きか、と言えばそうはゆかない。字体の好き嫌い各人各様だ。しかし、ともあれ福田紹太郎の文字はなかなかのものだった。

た。

四月十三日付け詩集を、四月二十六日に贈呈したこと。昔の春。生きのこつた九十歳の思いをこめて、前橋居住時に出した最初の二冊を、前橋文学館に収蔵してもらうことになった、その往年往来の縁し！

一九九六年夏 在横浜



伊藤 信吉

●いとう しんきち

1906（明治39年）、群馬郡元総社村（現・前橋市元総社町）生まれ。'24、萩原朔太郎を知る。'29、草野心平を知り詩誌「学校」に参加。'33、詩集『故郷』刊行。'36、評論集『島崎藤村の文学』刊行。'43、『萩原朔太郎全集』（小学館）編集。以後、創元社版、新潮社版、筑摩書房版の朔太郎全集を編集。'67、日本現代詩人会会長に就任。'76、『萩原朔太郎・浪漫的に』『同・虚無的に』により読売文学賞受賞。'77、詩集『天下末年』により多喜二・百合子賞受賞。'79、詩集『風や天』により芸術選奨受賞。'82、萩原朔太郎研究会会長に就任。'84、『風色の望郷歌』（朝日新聞社版）刊行。'87、『郷土望郷詩をめぐって』刊行。'92、詩集『上州おたくら一私の方言詩集』により丸山豊記念現代詩賞受賞。'93、『上州の空の下』刊行。'94、詩集『私のイヤリング』刊行。'95、煥乎堂書店（前橋）で「伊藤信吉文学展」、前橋文学館で「伊藤信吉展」開催。'96、土屋文明記念文学館初代館長に就任。